【入　選】

私達のくらしと水

仙台市立郡山中学校
三年　尾崎（おざき）　結（ゆう）

広い湖と、湖と複雑に入り組んだ山々。天気のよかったこの日、湖はキラキラと輝いていた。「わぁ…」想像していたよりもずっと大きい湖に、私は驚いて声をあげた。ここ、田子倉湖は田子倉ダムのダム湖だ。

私が訪れた田子倉湖は福島県の只見町にある。私はここを、学校の野外活動で訪れた。民泊先の方達のグループを只見町の様々な場所に連れて行ってくださった。その中の一つで田子倉ダムを見学した。ダムの方（かた）に特別に展望台に登らせていただき、そこで見た景色に私は圧倒されたのだった。

この田子倉発電所は一九六一年十一月に当時日本一の出力を誇る発電所として全台運転を開始した。現在は二〇〇四年から二〇一二年五月までの八年をかけて発電機の更新工事が行われ、日本の一般水力として二番目の出力を誇る水力発電所となった。そんな田子倉発電所のダム、田子倉ダムは、高さ百四十五メートル、長さ四百六十二メートルのダムで、約五億立方メートルの水を貯える田子倉湖はダム湖百選にも選ばれている。

田子倉発電所の他に、只見町には原生的で巨木の密度が高い貴重なブナ林がある。ブナと川のミュージアムというところを訪れ、このブナ林や只見町をとりまく自然について学んだ。ブナ林や動物、渓流などの自然が再現されていて、ここで改めて水は豊かな自然になくてはならないものなのだと思った。

しかし、私はこのミュージアムでもう一つのことを知った。田子倉ダムに沈んだ集落があるということだ。集落は田子倉集落といい、只見川の最も奥まった場所に位置していた。冬には最大積雪深四、五メートルを超える厳しい自然環境にあったが、山菜や獣などの天然資源に恵まれ、比較的豊かな生活が営まれていたという。昭和三十四年、田子倉集落は戦後復興のために首都圏への電力供給を目的とする田子倉ダムの建設により、湖の底へ沈んだ。当時、田子倉集落に住んでいた人々はやむなく故郷から離れることとなった。

田子倉ダムの建設で突然消えてしまった生活や文化。それらに対する集落の人々の思いはきっととても大きかっただろう。私は改めて田子倉湖はたくさんの思いがあった場所だったのだと気付いた。

野外活動は二泊三日で行われたが、私はその中で今までにないほどたくさんのことを学び、水と私達のくらしについて考えるきっかけとなった。そして、改めて私達人間だけでなく生き物全ては水に生かされていると思った。只見町のブナ林も、そこに住む生き物も水があるから生きていられる。活動の一つで行った田植えでも田んぼにはたくさんの水が使われていた。水があるから植えた稲は実をつけて私達の食べ物になる。また、田子倉発電所では水の力を利用して私達の生活に欠かせない電気を作る。そして、発電所を作るために故郷をなくした人々がいる。野外活動を通じて知ったことや感じたことから私は、私達は水に生かされていて、それは当たり前のことではないんだと思った。このことをふまえて私は、今の生活ができることを当たり前だと思わず、今まで以上に水を大切にしてくらしていきたい。